

ボランティアと個人の自発性

近藤良樹

1. 個人の自発的意志

ボランティアは、無給の労働、勤労奉仕である。しかし、無給であっても、それが無理やりに強制されたものである場合、強制労働、苦役であって、ボランティアにはならない。ボランティアであるには、自発的にこれに参加するという各個人の自由意志(voluntas)がふまえられているのでなくてはならない。その自発的意志に発することにおいて、その無報酬の勤労の内容も、強制労働などとはまったく異質の、生きがいのある充実したものになってくるのである。

現代のボランティアは、ふつう、生活のためにする雇用された勤労のそとで、自分の余暇・余裕においてなされる。このとき、その労働力は、だれにも売ってはならず、当人が所有している。自分が自由に処分できるその労働力を、ボランティアするものは、自分の自発的な意志において、援助の求められているところに贈与することを決定するのである。

その参加が自由意志によるのではなく、他のものによって命令され強制されるとしたら、(町内会の草とり等がときにそうなるのだが)、これは、「勤労奉仕」などとはいうけれども、ふつうには、「ボランティア」とはいわない。ボランティアには、自らの所有する労働についての、その贈与の自由な意志決定が当人のもとに存在していなくてはならないのであろう。「自発性」である。他による「他発」ではなく、「自」己自身の自由意志において、出「発」するということである。そのボランティアへと自己の労働を贈与していくことを自身において選びとったのである。

ひとは、社会的存在であり、他者や社会からの影響をうけて、その各個人の活動を展開していく。自発的といっても、そういう外からの影響の受容が全然ないよう各自の実際的な活動は存在しない。だが、反自発としての「強制」と単なる「影響」は区別されなくてはならない。影響を受けるといふばあいは、当人が自らにこれをもっとものことと納得して、あるいは、これを好ましいこととみなして受け入れるのであり、そうでないとしても少なくとも自らの意志に反したのではないのが普通で、自発性をさまたげるようなものではないであろう。これに対して、「強制」は、当人には納得のいかない、あるいは、当人が自発的に意志することとは対立するような、そとからの意志のねじまげ、意志の変更になる。この変更は、自らは望んでおらず不本意である。自らはそうしたくないのだが、それをやらないと大きなマイナス(危害や懲罰等)がもたらされるので、やむなく、これに屈して従うというのが、強制を受け入れるということであろう。ボランティアは、反強制に徹した自発性をもつもので、各人が自らの所有する労働を自らの思うところへ、自らに贈与していく自由なものであり、各人のひたすらに自発的な意志がこれを実現していくものである。

自由社会では、各人、自由な存在として、自発的なものを根本にもってなくてはならない。企業家は、自己の利益のために自発的に活動をはじめ、またそのためには他者を利用し手段化する

る。同じく自発的といってもボランティアは、その志向するものが逆になる。他者の援助が目的であり、自分はそれのための手段になり、献身していこうと自己犠牲へと自発的に決意するのである。

自発的献身というと、親が子供のためにという家族内での自発性が想起される。その無償の献身は、ボランティアとよく似ている。だが、親の献身は、あくまでも自分の子供のためであり、他人のために尽くそうというのではない。かけがえのない・代替不可能な身内に対して、かけがえのない存在として、自分の役割をはたしていこうとするのである。その点からいうと、ボランティアは、家族外の不特定の市民に対して匿名の存在としてかかわるもので、この自分がやらなくては代わりがないというようなものではない。ボランティアは、かならずしも、この自分が引き受けなくてもいい、自由である。やる、やらないについて、家族内でのように、自分がやらなくてはと指定され強制されているのではなく、自由に選択できるのであり、放っておいても、自分にその責任があるわけではない。だが、人間愛・連帯感情にささえられて、これを自分に背負うことを自発的に決意するのである。

家族は、もうひとりの自分として、相互に干渉しあう。ボランティアの場合は、相手を自立した個人である他者として尊重し前提しているから、自発的にといっても、そう踏み込んで干渉がましいことはできない。相手の求めていることを肯定して、その求めの範囲内でこれを援助するのである。しかし、家族の場合は、極端には自分に対するように、その自発性を発揮して、ときには、相手を独立した人格として顧慮せず献身（干渉）していくことになる。

2. 二種の自発性

ボランティアは、自分のためにではなく、他人のために働くのであり、しかも、それに対する報償としての賃金はなく無給だというのであるから、そのかぎりでは、この労働に、自発的に参加しようという気にはなれないはずであろう。だが、自発的に参加するのである。エゴとしての自己から見ると、不可解であるが、ひとには利他主義的な精神が備わっていて、そのエゴをおさえつけ、これを強制して、労働させていくものがあるのである。所属の全体のなかでの個人として、全体なり、その成員に連帯の気持、一体感をもち、これに役立ちたいと意欲するのである。不幸に見舞われている者に対して、これをもう一人の自分、自分たちとみなして、援助することが必要と考え、それを自分が引き受けなくてはならないとの当為の心情を、社会的理性的存在としていただくことがあるのである。

さらには、ボランティアにおいては、自己の社会的存在としての存在意義を見い出したり、感動や喜びをその贈与の活動のなかでいただくことができることもあって、なすべきだというよりは、やりたいとボランティアを欲求することがある。ボランティアの自発性は、「やるべきだ」という当為(Sollen)を主とするものと、「やりたい」という意欲・欲求(Wollen)を主とするものとにわけられる。そういう二種の自発性からなるのだということができそうである。

不幸に見舞われている人々をみて、その救済が必要だと思っても、それを自分（エゴ）は「やりたくない」と思うばあいがある。そこでは、援助・救済は、行政がやるべきだ、縁者がや

るべきだとなる。だが、いずれも引き受けようとしないうとき、自分をふくむ市民のだれかが援助の手をさしのべるべきだということになる。このとき、ボランティアしようというものは、自分のエゴをおさえて、自分がひきうけねばならないと決意するのである。周囲をながめてみて自分にふさわしいと思い、あるいは救済の強い要請を感じ、自分がやるべき (Sollen) だとして、自己を犠牲にする決意をするのである。自己犠牲を感じるものとしては、この当為 (Sollen) としての自発性は、自己強制の苦痛がともなっている社会的理性の自発性になる。感性はしづるが、理性がこれを押しえつけて、引っぱって活動にむかわせるのである。

これに対して、そのことにおいて自分の生きがいが見出だされ充実感をいやくことのできるボランティアの場合、自らにおいて「やりたい (Wollen)」ものとなる。理性のみならず、自分のエゴ・欲求も、そのボランティアに対して積極的なものであり、反対するものがない「やりたい」ものとしては、このボランティアの自発性は、「感性」の自発性ということもできるであろうか。お祭り・イベントのボランティアなど、この感性の自発性にもっぱら負っているものとなろう。これには、各人のうちで反対するものがなく、参加したいのであるから、当為の自発性からなるボランティアのように、先駆する者が勧誘しうながすという苦勞がなくてすむ。だが、ここでは、エゴが反対しだすと、ボランティアは成立しなくなるから、この自発性のみでは、当てにならないボランティアということになりそうである。

このふたつの自発性は、一つのボランティア活動のなかで多くは混在しているものであろう。「やりたい」と思っではじめても、いざ手をつけてみると困難が待ち受けていて、それを貫徹し活動を持続させることは、はじめの「やりたい」気持ちだけでは無理になることがある。しかし、ボランティアの受け手、つまり援助を求めている者は、待ち続けているのである。ここでは、理性的な当為 (Sollen) の自発性がそのあとを担っていかなくてはならない。そして続けていると、また、新たな喜びも出てきて、やりたいという意欲 (Wollen) も回復してくるといったことになるのである。

逆に、はじめは、いやいやで義務感から行なっているようなものであっても、なれると、おもしろくなって、感性の自発性になることもある。両方が交替しながら、ひとつのボランティア活動を成就していくことになるのであろう。自発的であるのは、その出発点のことにとどまるのではなく、その活動の成就にいたるまで求められるのであり、理性と感性、意志と欲求等が手を取りあってこれを遂行していくことになるのであろう。

3. 個人の自立した社会

自己決定をなし、自らが進んで実行していく自発性の発揮されるためには、それを可能とするような自己立法的な自由の精神が各個人のもとに確立されていることが望まれる。そういう個人が確立していなくては、自身の労働を贈与しようと自発的に自己決定することなどおぼつかない話であろう。

個人が自立的でない社会では、全体の支配者の命令にしたがったり、全体のおもむくところにしたがって、皆とともに右にならえと、他律的に自分のありかたを決定していく。われわれの

場合、みんながするからと、いやだけれどもと、半ばは強制されて、地域の道普請等の活動を行ってきた。ボランティア的な勤労奉仕は、我が国では各地域の共同体が地域の維持のために盛んに行なっていた。しかし、それは、勤労奉仕とはいわれても、ボランティアとはいいいにくいものがある。参加する個人の自由な自発的な意志が前提されていないからであろう。ボランティアは、こういう他律的な、外的に強制されるものとは相容れない、自律的精神に基づいた活動になる。

近代資本制は、国民一般を自由な存在とした。それは、否定的には、餓死しようとする好きなように、ということになったのだが、自己の全存在は、自己のものとして自由に処分できるものとなった。その自由な処分は、主要には生活のささえとしての、気に入った賃金労働を自由に選択するという形でなされているのだが、その余暇・余裕に百パーセント自由な自分の時間が可能となった。この余裕の自由の部分は、まさしく余裕・余剰となって、自分のためではなく、他者なり社会への贈与にと、つまりボランティアにとむけられ得る時間ともなった。ただし、一般の労働者には、つい最近まで、長い労働時間と疲労のもと、真に自由にできる時間・余裕はあまりなかった。それが可能になったのは、ほんの最近のことである。

自己の存在を自分で処理できる自由のあるところでは、積極的には、自発的な個人の確立が可能となる。自立した個人の形成、独立存在としての一者の成立となる。各一者は、独立した自律的な存在として、他からの、全体からの無理やりの強制は拒否して、自身の納得するものについてのみ、これにしたがって行く態度をとる。

ボランティア活動は、この個の確立を大切にしたい運動の極致をいくものであろう。ボランティアにもとづく慈善事業をはじめるとしたら、まずは、個人的個別的に寄付をつのって資金を集めることになろう。個人的賛同・納得をえて、資金は提供される。そして、これをもとにして、これと平行して運動主体になるひとびとが募集されるが、これも各個人が、呼び掛けに応じてそれに賛同し納得して自発的にこれに参加するのである。各個人の主体性を尊重した民主主義の手続きにしたがって、ボランティアは、展開されていく。

そのかぎりでは、個別・個人の集合体とその運動のみがあって、「全体」つまり政府とか自治体等は不在となり、全体の役割を高く評価する者からは、全体の視座から全員が一致してなすべきことを善意の有志にのみたのんでいるものとして、もどかしいと思われなくもない。たとえば、戦争に際しては、志願兵(=volunteer)によっているのみでは、国民皆兵で大勢力の敵方に対抗できないし、自分の利益しか考えないエゴイストは、志願しないから、善意の人・良識ある人のみが犠牲になるという愚かしいことになりかねない。

各個人の自覚的参加をまつことにするか否かは、事柄次第、状況次第となろうが、自由な自律的一者からなる民主主義の根本からいうと、何ごとであれ全体からの一方的強制はなるべくさけて、各個人の納得をもって自発的に参加するという体勢がとられるべきであろう。ボランティアは、その典型となる。個人によびかけ、自発性をひきだせるようにと意識変革をはたらきかけるといふ、面倒ではあるが、自律的一者としては当然そうあるべき自発的な状態にそのつどもっていくことになっていて、民主主義の根源的なすがたをそこではとり続けているのである。

政府などの全体と、各自発的な個人の関係は、おそらく両方が有機的にささえあうものにな

るのがいちばんであろう。個人とその自発性を尊重するボランティアは、政府とか自治体というような全体の活動とは別の活動として（ときには政府などの全体と対立する個ともなるわけだが）、受動的な存在になりがちな個人に対して、なによりも能動性・自律性・自発性の発揮できる場を提供する。それは、自由で民主的な社会をささえる一者（自律的個人）を再生産・再教育していく活動ともなり、したがってまた、この社会制度を維持・強化していくことに資すること大きいものがあるように思われる。

「老人ボランティア」がいわれているが、これは、全体と個というものを考えるとき、日本でも今後、大いに取り組んでいくべき課題の一つとなりそうである。長寿化で、全体（政府や自治体）の方からいうと、財政的にも人的にも老人問題は深刻になっている。しかし、それは、ことの消極的な側面であり、老人は、ケアされる存在にはとどまらないという積極面からもみていかねばならない。つまり、逆に、社会に有用な働きをなし、そういう役立ちをつよく望んでいる存在なのでもある。「老人ボランティアの役割」が「社会的サービス」にとり「本質的になっている」（註1）というアメリカの「老人ボランティア older volunteer」の話は、日本の話でもある。まだまだ、仕事ができるのに、それがあたえられないことに老人は不満をいっている。生活の保障は、けっこうあるから、年中が余暇であり余裕の時間になっているといってもよい。自分の特技をもって社会に役立ち得るならば、自分の存在の意義がなおあることを発見し、充実した生をとりもどすことにつながる。個人として大切にされながらそのもてる能力を有効に活用し、社会全体へとかかわりをもっていく「老人ボランティア」は、老人の一者的な独立自尊を維持するためにも、意義深い制度になるのではないかと思われる。

4. 自己強制

voluntary giving（自由意志に基づく贈与〔寄付行為や奉仕活動〕）は、お金のばあい、一瞬の決意ですむし、贈与の意志の表明のみでよい。だが、ボランティアは、行為への決意であって、存在そのものをそこにそそぐのであり、当然それへの意志の持続性も必要となる。意志は、自己をボランティアへと強制していかなくてはならない。他者や全体からの外的強制は拒否し、自分の自発性によるものとして、ボランティアは、自由なものだが、自身において内的には、強制がもとめられる。

ボランティアするものは、一面では、この活動を自らが進んでやろうと意欲し(Wollen)ているのだが、他面では、自己のうちにあるエゴの部分、怠惰な部分は、これに抵抗する。これに対しては、意志は、強制し抑圧して、やらねばならない(Muessen)と主張する。あるべき(Seinsollen)すがたを描いて、そうすべき(Tunsollen)だと意志することになる。あるいは、意志のみにとどまることなく、感性も、悲惨な現実を見るなかで惻隱の情にかられ、意志と共に「情熱」をつくりあげて、エゴを自己抑圧し、つまり内的強制を行なって、ボランティアへと自分をささげている場合もある。

外的な強制の場合、それを強制するものがなくなったとき、活動は停止することになるが、内的に強制している場合、そこからはなんらの強制がなくても、自分自身が常にそれへと自らを

かりたてているので、より確実な強制となる。自発的な精神をもってボランティアに参加するのは、内的に強制して、やらなくてはならないと意志しているわけで、その点では、困難に出くわしても、くじけたり、なまけるようなことが、外的強制をもってなる雇用労働などよりは少なくなるといえる。ただし、余裕・余暇にやる気楽なものとしては、いやでもやらせようというような外的な強制がないことにおいては、少々、無責任で頼りにならないものとなる可能性もある。

自発性は、内的なつらさをともなう。金子は、ボランティアの「自発性パラドックス」をいう(註2)。「自分がすすんでとった行動の結果として自分自身が苦しい立場に立たされる」(註3)ということである。「人が自発性に基づいて行動するとき、なにを、どのように、どこまでするか、原則としてすべて自分にかかってくる」のである(註4)。自分で決めたことだから、‘無理やり押しつけられたことで、やっぱりやめることにした’などとは言い訳できない。その行為が人から攻撃されることの‘つらさ’をひきうける必要があり、それ以上に自責のつらさがあるというわけである。

自発性をもってはじめられた活動では、自分のその意志を貫徹していく責任が他者に対して生じるが、さらに重要なことは、活動の結果への責任というものが生じることである。自由な自発性による活動では、自分にその結果の原因があるのだから、この結果に対しては自分が責任を負うということが必要になる。ボランティアは、どちらかというときびしい賃金労働や商業活動とちがって、「無責任」「頼りにならない」と特徴づけられることが多い。その労働が頼りにならないとしても、それは、本来は有料のものを、無料で行なっているのだから、無理はいえないというわけである。だが、「自発性」という点からは、自分ではじめたものとしては、その結果については、それなりに自分の責任がとられるべきなのである。

ボランティアは、自発性に基づくものとして、外的な強制とは相容れないものになるが、それは、理想・理念型としてのことで、現実には、かなり外的な強制のみられるものもある。町内会や学校での奉仕活動の一部にはそういうものがある。あるいは、最近、ボランティアをしたら、学校の単位を出すとか、入学試験の参考にするとかいわれだしている。これらは、単位を得たり合格するための手段としては、自発的ではなくて外的な強制に近いものとなり、ボランティアとしては、そのような周辺部に位置するものになりそうである(しかし、本来的なボランティアに誘うための教育的な配慮という点からは、おそらく有益である)。わが国の場合、個人の自立化が弱くて、各個人が自らにおいて判断してやるべきものも、しばしば「右にならえ」と「みんながやるので自分もやる」式になる。個人の自発的な参加のボランティアも、そういう傾向がある。地域とか職場などのボランティアの場合、自発的で任意なのではあろうが、みんなの目が強制しているからというようなことがある。その外的な評価を気にしながら自身を内的に強制している、伝統の「勤労奉仕」的な色彩の濃厚なボランティアである。

5. 受動性・受容性

自発性(Spontaneitaet)は、受容性(Rezeptivitaet)と対になる。ボランティアは、自発的だが、同時に受容性・受動性の面も持っている。ボランティアを求めている者が、まず第一に存在

しているのである。この現実を前提にして、これを受け入れ、その求めに応じて勤労を贈与していこうというのがボランティアの出発点である。この始発の段階については、受動的であるのが原則であろう。ボランティアは、自発的であるが、まったく自分からすべてをとというような、もっぱらに内発的なものなのではない。まずは、そとからの触発がある。つまりこの点では自発ではなく「他発」なのであって、これを敏感に受容するという受容性(Rezeptivitaet)をふまえているのである。

ボランティアするものがその活動内容について、求められてもいないのに、勝手にこれを押しつけるような場合、そういうところまで自発的にやるのでは、される方は、よけいな世話だということになるかもしれない。老人がひまにまかせてやる近所の公園や道路の草木の手入れぐらいなら、勝手にやっても、めいわくがるものはあまりいないであろうが、頼みもしないのに、防火ボランティアと称して家の中までふみこんで来られるとなると迷惑千万で、「ボランティアお断わり」ということになるろう。

ボランティアでは、まず、震災などで罹災者が援助をもとめているといったような「所与」が大前提としてある。もちろん、自分が「課題」をも設定していくこともあろうが、それでも、本源的には、そこにも所与性があるのではないか。所与のものを自発的に課題として発見するのである。「山がよごれている」「町のカイドがいる」と求められていることを、そういう所与・前提をふまえ、これを顕在化して、それを自らの課題としていくのである。ボランティアでは、自発性が尊ばれる。そうでありつつ、その求めについては、勝手に決めるのではなくひたすら受け入れてこれを大前提としてはじめていくのであり、その点では始元において受動的である。

ボランティアをコーディネートするものは、ボランティアしてもらいたい内容について、受け手の求めるものを活動内容としていくために、ボランティアするもの自身がそれを自発的に意志していけるように、その自発性を最大限尊重しつつ、「うったえ」「よびかけ」「さそう」のなくてはならない。その点では、ボランティアするものは、まずは受動的な存在として登場する。能動的な自発的な行為の贈与者となるようにと求められる、受け身の存在である。

ボランティアをコーディネートする人にしても、その援助されるべき求めをふまえるのであり、自分がかってにするものではない。その現実をありのままに受け入れて、それから始めていくのである。現実が呼び掛けているその求めをだれよりも敏感に受けとめている人になる。ひなどりが口をあけていて、それにおやどりがえさをいれていくのに似ている。口をあけているものの求めに応じるのであって、(フォアグラ製造用のがちょうの飼育のように)口をむりやりこじ開けて、勝手に自発的にえさを詰め込んでいくのではない。求めがあり、さそい、よびかけがあって、これにこたえていくのである。ボランティアは、社会的援助の活動であり、求め・援助に対して、自らの手をさしのべるもので、敏感にうけとめていくという受動・受容が根底にある。

6. あやつられる「自発性」

ボランティアは、自発的でなくてはならないが、その根本において、あるいは、はじめるに際しては、基本的に受け身である。援助を求めている者自身から、あるいはボランティア団体な

だから、さそわれるのであり、よびかけられるのである。ボランティアは、すべてを一人でする完璧な自発性からなるのではなく、出発点では、他発的で「呼び掛けられたもの」として「受け身」であるのがふつうで、その点で、のせられ、あやつられたものになる可能性をもつ。

もちろん、その援助についての理解をもち、その活動を贈与することに納得して、自発的にはじめていくものとしては、盲目的行動とか強制される活動とは違って、自分で決意し決定したものとして責任のとれるものになるのではあるが、扇動されているにすぎないというようなことも出てくる。強制的な場合、それは自身としてはやりたくないということがあるから、強制がなくなるとただちに停止する。しかし、扇動された誤ったものであっても、自発的な形式をとる場合は、扇動されなくなっても、自分で納得して自発的にはじめているので、誤りは、そのまま続行されることになる可能性が大きい。

ボランティアは、各人の自発性によっているものとして、「さそい」「うながし」がなされるのだが、それは、ときには、「のせられる」「あやつられる」ものとなる。いかに自発的自律的とはいっても、各個人の判断のもとになる情報そのものは、個人的にはかなり限定されたものとならざるをえず、マスコミなどを利用する以外にない。かりに、情報を操作する人たちが、隣国について、否定的で敵愾心をあおるような情報ばかりを流していくとしたら、その範囲内で判断していく国民は、いずれは、「聖戦のボランティア」をと決断していくことになるであろう。

いつの時代も支配者たちは、国民をあやつって、各人の自発性によびかけ、その自発性に依拠しようとしてきた。各人が支配者の目的とするものによってきて自発的に活動を展開するならば、むちで外的に強制するのとちがって、以後は放っておいても自動的にことがらは楽々と成就していく。全体主義の社会というと、全体からの外的強制が想像されるが、必ずしもそういう単純な形をとるものではない。ここでも、その全体の支配者の意図するものを各国民各個人が自分のこととして引き受け、各人が自発的に取り組んでいくというかたちをできるだけとろうとする。自由に自発的に、独裁者を崇拜し、その指導を自発的にわれさきにと求めていくのである。勤労奉仕への自発的参加はもちろんのこと、ときには、独裁維持のための弾圧・粛清にすら、国民は、自発的に参加し、隣人を密告していく。

逆の民主主義下においては、そういう、あやつられた仮象の自発性はないのかということ、やはり、ここにも、作られる自発性は存在する。全体主義とちがって、各人の自由・自発性が可能なかぎり尊重され、あるいは、放っておかれて、自発性にまかされているともいえるので、あやつられた、錯覚としての自発性など、一見、ないようにも思えるのだが、しっかりと存在している。ひとは、孤独に弱い存在で、個をつつむ全体的なものによりかかろうとし、E. フロムが指摘したように、えてして自立をこばみ「自由からの逃走」をしがちなのである。マスコミを通じて、政府や自治体等を通じて、繰り返して宣伝がなされると、個人は、全体や権威づけられた声に意外と簡単にのせられる。オリンピックなどのイベントでのボランティアには、そういう感じのするものがある。

註

1)The Older Volunteer compiled by C. N. Bull and N. D. Levine. Greenwood Press. 1993. p. ・)

2)金子郁容 『ボランティア』 岩波書店 1992年 103頁以下参照

3)金子『同上書』 105頁

4)金子『同上書』 106頁

平成10年5月 『HABITUS』(西日本応用倫理学研究会) 1998年5月号 35~47頁